



## イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 529 回 お爺ちゃんにとって、孫は貴重な「教師」である。

2013.6.16



孫が来た。もうじき 8 か月になる。  
ずーっと、孫を見ていると、つい、時間の流れを忘れてしまう。  
「孫は可愛いよ…」、良く言われる言葉だが、  
無条件の可愛さとは、このことであろう。  
孫をじっと観察していると、色々なことが見えてきた。

8 か月になると、表情が見違えるほど豊かになった。  
足と手をバタバタさせ、全身を使い何かを訴えてくる。  
良く泣き、よく笑い、赤ちゃん流コミュニケーション手段は、  
なるほどこんな沢山あるのかと、驚いたりもする。

泣き方に表情が出てきた。たとえば眠い時はぐずり泣き、おなかがすいた時は怒ったように泣く、人を求めているの甘え泣きもあり、泣き方で何を訴えているかわかるようになる。  
孫を授かる以前は、電車の中で他人の子が「ギャン泣き」(大泣き)している光景に出くわすと、迷惑そうな顔をして、イソイソ逃げ出したものだ。  
「この子は一体何を伝えたいのか？」  
今は、その泣いている子の顔をつい、覗き込んでしまう。

ついこの間まで、生理的的微笑み、いわゆる対象のない笑みを浮かべることがあったが、今は明らかに、周りの大人の笑顔に対して敏感に反応し、最もよく笑うようになった。  
この時期に、赤ちゃんの笑いを引き起こすものは人の顔、ママやパパはもちろん、おじいちゃんやおばあちゃんが笑えば、赤ちゃんも笑う。自分を愛してくれる大人の笑顔に触発されて、赤ちゃんの笑顔が生まれるだろう。『あなたが生まれてきてくれてありがとう』、至福の喜びを込めた大人の笑みは、赤ちゃんにも『私は愛されている』という喜びの感情を育むのだと思う。このシーンこそ、感情や気持ちが繋がらあう劇的な出来事を意味する。  
このような快感情の共有こそコミュニケーションの原点であり、自分の存在の意味や喜び、さらには自尊感情を育むことになる。

我々が目指すべき「おもてなし」は、相手の気持ちになって自分の行動を律すること、そう言い続けてきた。相手の気持ちをどう、理解するか、相手が何を求め、何を伝えたいのか、チェンジチェア®の精神鍛錬である。その基本的ベースがここにあった。  
「言葉」という便利なツールを持たない赤ちゃんのコミュニケーション術が、とても大切なことを教えてくれる。孫は無条件の可愛さであり、便利過ぎる今を生きる我々に、忘れかけていた「人」と「人」を繋ぐ「紐帯」(ちゅうたい)を教えてくれる、貴重な教師でもある。